

仕事で活用できる知識について

1. 固有知識の重要性

仕事に使う知識は、数学などのきちんとした学問体系にのる一般的知識と、それまでの組織内での蓄積による固有知識がある。一般的知識は学校教育で教わるし、必要性を明示できるが、固有知識に関しては、暗黙的な認識となることも少なくない。しかしながら、会社の競争力は、固有知識の活用能力に依存していることが多い。例えば、技術的な検討を行う場合に、一般的知識も活用するためには、適切なモデル化が必要である。このとき、知識が働く舞台となるモデルの作成は、その組織の固有知識として伝承されていることが多い。このような固有知識は、体系立てて教えることが難しく、多くは仕事の上での経験知として暗黙的に伝授されていた。

就活時や新入社員が陥る罠の一つに、この固有知識を知らなかったり、軽視したりする状況がある。例えば、市場調査などで統計的処理を行う場合に、現実を得るサンプル数は少ない。従って、一般的な統計学の知識では、結論を出すには不十分となる。しかしながら、従来の市場調査との比較や、顧客の心理モデルなどの知識と擦り合せれば、このような少ないサンプルからでも、必要な意味をくみ取ることが可能になる。これが会社の蓄積の力である。これを理解できないで「統計学的に無効」などと言えば、生意気な新人の暴言となる。

一方、一つの組織に適応しすぎると、この固有知識を前提として考えることが当然のものとなり、状況変化時にも対応できなくなることもある。本当の総合職・管理職そして経営者は、この固有知識を上手く使いながら、適宜状況の変化に応じて変えていくことが、重要な任務となる。

2. 固有知識の上での思考方法

このような固有知識は、完全な定式化ができないことが多く、思考方法も前例からの帰納的推理や、類似例からの類推、個別例での思考実験的動作での検討などの、学問世界では曖昧と評価される場合も少なくない。学問的な思考法では、厳密性が重視され、一本の糸のような鋭い論理展開が評価されることが多い。一方、会社での問題解決は、推論の丈夫さが重要になり、複数の根拠や、多面的な見方での議論を重視する。

また、用語等の扱いにも違いがある。学問的な用語に比べて、会社の固有知識の用語には、定義が不完全なものが多い。しかしながら、多くの具体例と、それに関連する一般的・経験的知識が絡み、抽象の梯子の上下への広がりがある。組織特有の用語や、擬音語などで、多くの情報を伝える場合もある。

このような固有知識の世界で思考するためには、自分がその世界の中に棲み込み、抽象の梯子を自由の上下し、その世界の中で色々思考実験を繰り返せるほど豊かな想像力が必要である。

上記をまとめると、表1のようになる。

表1 一般的知識と固有知識の違い

一般的知識	きちんと体系づけられて論証のできる形式的な記述 理想の世界で定義のしっかりした低文脈依存の記述 数学～物理学～工学などの体系的知識等 事務屋の世界では法律や規則集 モジュール化されていてブロック的に積み上げ可能 公理からの演繹的な展開が議論の基本
固有知識	経験の蓄積の上での知識、製品の設計や市場の Know How 等 経験事例などの文脈依存が大きい曖昧さを含む情報（具体性あり） 用語は経験的なもの等を多く含んでいる 総合的な多くの要素のすりあわせで成立している 知識の境界は曖昧で必要に応じて付加し無視する 前例からの帰納的推測・類推およびモデル上の思考実験で議論

3. 固有知識の可視化

このような固有知識の可視化の一手段は、検討用のモデルである。このモデル構築段階の必要情報の取捨選択が価値観を伝える。また同様に、一葉の用紙に記述する検討書作成も、必要情報の選別と言うことで固有知識の保持を示している。

特に、報告書などの文書は、初心者や一般職は既存の様式に必要事項を埋めていくことで、枠の中での思考を自動的に行うようになる。一方、総合職や管理職は、書式や記述内容を自主的に取捨選択することで、検討の場を変えることもできる。

このような訓練の場として、一葉の文書にすべてをまとめる訓練は、暗黙的な固有知識の明示化や、作成者の理解を深めるためにも効果的である。総合職は文書作成を軽んじてはいけない。

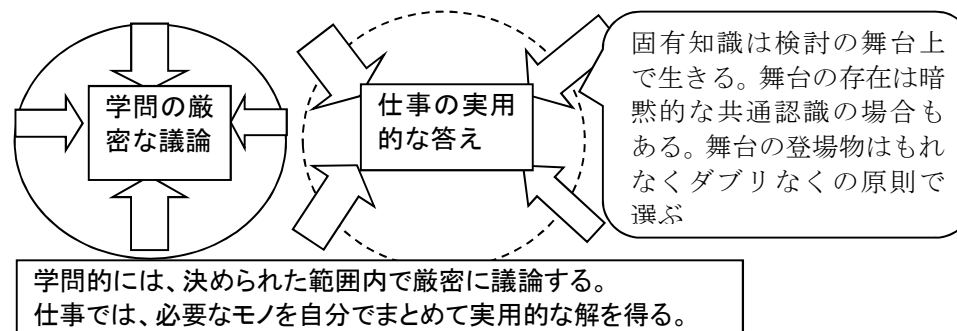


図1 学問的検討と仕事の検討

以上